第３Ｂ分科会　研究課題「教育環境整備に関する課題」

研究主題「学校、家庭、地域との連携と協働を図る取組と教頭の役割」
～　えびの市における地域学校協働活動を通して　～

西諸県支会　えびの市立小中学校教頭会

１　主題設定の理由

新しい学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」が基盤とされている。子ども達は、学習の中で社会とのつながりを意識することで社会への関心を高め、社会との関係を学んだりする機会となり、将来の社会人としての基盤づくりともなる。子どもたちが将来自立した社会人となるための基盤をつくるためには，学校の努力だけではなく、家庭や地域が学校と連携して、同じ目標に向かう協力体制を築くことが不可欠である。

えびの市では平成２１年度から学校支援地域本部事業が始動し、主に地域コーディネーター（令和２年度からは地域学校協働活動推進員）を介してそれぞれの学校が地域との連携を進めてきた。しかし平成２５～３０年にかけて、各中学校区まちづくり協議会が相次いで発足し地域との連携の在り方が多様化してきた。

そこで、えびの市における学校、家庭、地域との連携と協働を図るための教頭の役割・在り方を明らかにすることは、「開かれた教育課程」を推進することは意義深いと考え、本主題を設定した。

２　研究のねらい

学校、家庭、地域との連携と協働を図るための教頭の役割・在り方を探る。

３　研究の経過

(1)　１年次（平成３０年度）
研究主題の設定、研究内容の検討

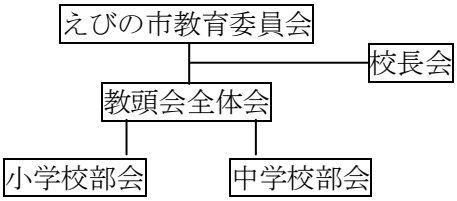
(2)　２年次（令和元年度）
研究組織、アンケート作成、実践

(3)　３年次（令和２年度）
実践、アンケート集計・分析、改善策検討

４　研究の概要

(1)　組織

市内８校の小中学校（教頭９名）を全体会とし、状況に応じて小学校、中学校の分科会を中心に活動を行った。



(2)　各学校の地域学校協働活動実践（地域と学校が目標を共有して、相互にパートナーとして連携・協働して行っている活動）

○飯野小･･･麓輪太鼓踊り、米作り、昔の遊び
○飯野中･･･面接指導、平和学習、書写指導
○上江小･･･輪太鼓、田植え体験
○上江中･･･グランドゴルフ、あいさつ運動
○加久藤小･･･兵児踊り、米作り、地層見学、史跡巡り
○加久藤中･まちづくり協議会との連携（面接指導など）
○真幸小･･･まちづくり協議会との関わり
○岡元小･･･鎌踊り、学校運営協議会からの取組
○真幸中･･･二日市クリーン作戦

例に挙げたように学校毎に地域に根ざした特色ある活動を取り入れており、教師だけでは指導が難しい活動もある。

地域支援ボランティアへの協力依頼は地域学校協働活動推進員や、各中学校区まちづくり協議会担当者に教頭が連絡をとり、担当教諭等へ引き継ぐことで教職員の負担軽減にもつながっている。

(3)　双方向性の連携・協働に向けた取組

①　目標の共有の場の工夫

教頭が地域学校協働活動推進員や、各中学校区まちづくり協議会担当者に連絡をとった後は、担当者同士の事前打

合わせの場を設定した。その中で活動の「ねらい」を十分説明し理解してもらうことで目標の共有を図った。

② 振り返りの場の工夫

活動後は地域支援ボランティア、児童生徒・教師の３者にアンケートを実施し、改善を図った。アンケートの項目はねらいの達成や活動の改善要望に関する以下のとおりである（意見欄も設置）。

ア ３者共通項目

(ｱ) 「活動を通して、ねらいが達成できましたか」

(ｲ) 「今回の活動で、改善してほしいことはありませんか」

イ 教師、児童・生徒共通項目

(ｱ) 「地域支援ボランティアの方に参加していただいて効果があったと思いますか」

ウ 地域支援ボランティアのみの項目

(ｱ) 「地域支援ボランティアの方に参加していただいて効果があったと思いますか」

③ アンケート結果を生かした改善策

アンケートの意見欄から得られた改善策や新たな取組につながるような意見については、担当職員と協議し活用を図った。

④ 積極的な学校からの発信

活動後は、学校通信やホームページへの掲載、コミュニティーセンターへの掲示等により情報発信を行っている。参加していただいた地域支援ボランティアの方も楽しみにしているようである。

(4) アンケート結果分析

① 教師、児童・生徒、協力者の３者に共通項目「活動を通して、ねらいが達成できましたか」では

%	はい	いいえ	分からない
教　師	95.1	0	4.9
児童・生徒	85.2	2	12.9
協力者	87.8	0	12.2

３者ともに「はい」の割合が高いことからねらいは十分に達成できていると判断できる。

また、児童・生徒の感想から講話や活動を通して新たな発見があったり、えびのについてもっと知りたいという意欲が高まったりしている様子がうかがえた。

② 教師、児童・生徒の共通項目「地域支援ボランティアの協力は効果的であったか」では

%	はい	いいえ	分からない
教　師	100	0	0
児童・生徒	85.2	2	12.8

教師の立場からは有用性をはっきりと感じられているが、児童・生徒の立場からは多様な受け取り方を感じられる。しかし、高い割合で児童・生徒も有用性を感じている。

また、専門的な知識や教材での指導等、学校では提供できない体験があり児童・生徒のみならず教師側にも収穫の多い活動になっている。

③ 協力者のみの項目「活動に参加して、元気をもらいましたか」では

%	はい	いいえ	分からない
協力者	100	0	0

地域ボランティアの方々は児童・生徒と接することで元気をもらえていることが数値からはっきりと分かった。

④ 協力者のみの項目「活動に参加することはやりがいにつながっていますか」では

%	はい	いいえ	分からない
協力者	97.6	2.4	0

地域ボランティアのほとんどの方がやりがいを感じてもらっている。

5 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

① アンケート結果より地域ボランティアの活用が、学校と地域双方向にとって有効であることが確認できたため、積極的に活用しやすくなった。

② 教頭が担当者同士の事前打ち合わせの場を設定することで、活動の目的をしっかり共有でき充実した活動につながった。

(2) 課題

① 新型コロナウイルスの感染状況により、中止・延期となる活動が多かった。Zoom を活用するなど、新しい生活様式を取り入れ、工夫していく必要がある。